法崇述『仏頂尊勝陀羅尼経教迹義記』訳注㈢

佐々木大樹

一、はじめに

本論では、前号に引き続き、法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼経教迹義記』（大正蔵一八〇三番、法崇疏）について訳注を行う。前号では、①教起因縁分の証信序のうち（※拙論訳注㈠末のシノプシス表参照）、信成就の訳注を行ったので、今号では聞成就・時成就・主成就・処成就を取り上げたい。

今号の範囲では、興味深いことに注釈の出典として「長耳三蔵」への言及が見られた。法崇疏中には、長耳三蔵に関わる文として以下の三つが含まれている。

①「又長耳三蔵解時云。有三種。一分段時。二不思議時。三仮名時」（『大正蔵経』三九巻一〇一八頁中段）

②「長耳三蔵云。菩提有五種。一者発心菩提。二者伏心菩提。三者明心菩提。四者出到菩提。五者無上菩提」（同一〇三六頁中段）

③「長耳三蔵云。習種性已前名発心位。次三十心名伏心位。入初地至七地明心位。入後三地名出到位。無明種除名無上位」（同一〇三六頁中段）

長耳三蔵とは、智顗以降の多くの中国僧によってその言葉が引用されながらも、長らく正体不詳の僧であったが、[1] 船山徹氏によって隋代に活躍した訳経僧・那連提耶舎（Narendrayaśas、四九〇～五八九）に比定されている。また、櫻井唯氏は、長耳三蔵の根本文献は早くに失われ、孫引きによって断片的に学説が流布したと述べ、長耳三蔵の学説は変容しながらも、ある種の権威として捉えられていたことを指摘している。本論の主旨と異なるため、これ以上の長耳三蔵への詮索は差し控えるが、高基本「附録」にまとまった考察があるため、参考までに記載しておきたい。

長耳三蔵等の文、『宋僧伝』二十三左十志通の伝に出す。曰く耳輪、上に聳えて頂を過ぎ、名は定光と文り。同伝第三十五十曰く、漢杭州の耳相院行修伝に長耳和尚と文り。『菩提心義』真潘二葉左に長耳の釈を出す。僧伝の和尚と今の文の三蔵と同異、更に考えるべし。（高基本「附録」八丁左～九丁右）

法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼経教迹義記』訳注（高基本・上巻一八丁左～、『卍続蔵経』三七巻一八七丁右～、『大正蔵』三九巻一〇一六頁下段～）

【①―一―二　聞成就】　経に曰く、「**我聞**（我れ聞けり）」とは、述して曰く、第二に聞成就なり。亦た三門に分別を作す。一に阿難の名を釈し、（高基本・上巻一九丁右）二に阿難の因を釈し、三に正しく其の聞字を釈す。

第一に阿難の名を釈すとは、是れ梵語にして、漢には歓喜と云う。故に『五分律』に曰く、「師子頬[2]王に其れ四子有りて、皆な国王と作れり。一に浄飯[3]と名づけ、二に白飯[4]と名づけ、三に斛飯[6]と名づけ、四に甘露飯[7]と名づく。且く浄飯王に其れ二子有り。一に悉達多[8]と名づけ、二に難陀[9]と名づく。白飯（大正蔵本一〇一七）王に亦た二子有り。一に抜提[10]と名づけ、二に提沙[11]と名づく。斛飯王に亦た二子有り。一に提婆達多[12]と名づけ、二に阿難陀[13]と名づく。甘露飯に亦た二子有り。一に摩訶男[14]と名づけ、二に阿泥盧豆[15]と名づく。

其れ浄梵王の大子・悉達多は、年十九にして輪王の位を捨つ。二月八日の夜半、子の時[16]に於て城を踰え出家し、一つに安禅を志し、合掌定心にして坐し、苦行六（卍続蔵本一八七左）年、日に麻麦を食し、皮骨は相い連なれり。王、是の如くなるを聞き悲泣し、歎じて曰く、『我が子、（高基本・上巻一九丁左）輪王の位を捨て、空しくして得る所無し』と。菩薩、後に於て香乳を食し訖り、尼連禅河[17]に入る。其の質を洗い已りて、金剛座[18]に往きて自ら誓を発して言く、『結跏[19]を破らずして等正覚[20]を成ぜん』と。是の語を発し已るに天地震動し、魔宮、安ぜざるなり。

時に天魔波旬[21]、既に菩薩の将に成道を欲せんとするを見て、八十億の魔女、及び鬼を将いて、種種に相悩して六十由旬を満たし、来たりて菩薩を怖す。爾の時に菩薩、慈定三昧に入り、魔の刀箭をして化して蓮華と作らしむ。魔、如からざるを知りて、即ち浄飯王の宮に往きて、其の父王を悩す。虚空の中に於て之に告げて曰く、『汝が子、昨夜、命終し已訖[22]んぬ』と。王、聞きて驚怖し、覚めず床より堕し、

良に久しくして乃ち蘇る。悲泣流涙し、偈を説きて言く、『阿夷陀[22]の言、虚にして瑞応も亦た験無し。先の吉利と名とを得ること、一切獲る所無し』と。

爾の時に浄飯王、此の語を説き已んぬ。菩提樹の神、仏の（高基本・上巻二〇丁右）成道を見て、天の曼陀羅華[23]を将いて、浄飯王の宮に往き、虚空中に於て偈を説きて言く、『汝が子、已に成道せり。魔衆、已に退散し、光明は日月の如く、普く十方の国を照らせり』と。

時に王、疑いて曰く、『前に我が子、已に死せりと言い、今は成仏せりと道う。所言、何ぞや』と。樹神、答えて曰く、『前は是れ魔王なり、故に来りて相悩す。我れは是れ菩提樹の神なり、今来たりて相慶す』と。王、時に喜びて曰く、『我が子、輪王を捨て、法輪王を成ぜり。彼此、失無し』と。浄飯王、正しく歓喜の時、斛飯王、来たりて浄飯王に報じて曰く、『貴弟の夫人、已に一男を誕めり[24]』と。王、聞きて歓喜し、衆、慶び皆な来たる。『此の楽に因んで、名づけて歓喜と為す』と。又、頌に曰うが如し。『面は浄満月の如く、眼は青蓮華の若し。仏法の大海水は、阿難の心に流入す[25]』と。此れ即ち第一の阿難の名を釈し竟んぬ。

第二の阿難の因を釈すとは、『法華経』に云うが如し。「我れ阿難と与に空（高基本・上巻二〇丁左）王仏の所に於て同時に発心す。我れ常に精進を行じ、阿難、常に多聞を楽[26]えり」と。又、釈迦牟尼仏、昔、迦葉仏[27]の時に沙弥[28]と為る。時に師主、毎日千言を誦えしめ、復た常に二人の食を乞わしむ。恐れて経を誦うるも得

ずして、路に在りて啼哭す。爾の時に一（ひとり）の長者有り。沙弥に問うて曰く、「汝、何ぞ憂悩を為すや」と。沙弥、報えて曰く、「我が和尚、我をして千言を誦えしめ、復た我をして常に二人の食を乞わしむ。我、恐れて経を誦うるも得ず。所以に憂悩す」と。長者、報えて曰く、「汝、心を安じて経を誦うべし。今より已後、常に来たりて弟子の家に向かわん。二人の食を取りたまえ。師、若し成仏せば、願わくは法蔵の弟子と為らん」と。昔日、誦経の沙弥とは、即ち釈迦牟尼仏、是れなり。食を施す長者とは即ち阿難、是れなり。此れ則ち第二の阿難の因を釈し竟んぬ。

第三に正しく其の文を釈すとは、『仏地論』に云く、「我とは諸蘊と為す、世俗の仮名なり。聞とは耳根と為す、識を発して（高基本・上巻二一丁右）所説を聴受す。別を廃して総に就くが故に我聞と説く」[29]と。

問うて曰く、仏、無我を讃じたまう。何為（なんすれ）ぞ伝法の菩薩、称するに我聞と曰うや。答えて曰く、此れ仏の説法は、常に二諦[30]に依りたまう。一は俗諦、一は真諦なり。我聞と言うは、俗諦の説なるのみ。仏の言く、諸根に我と説き、或は無我と説くも、諸法実相の中に我も無く、非我も無し。又、朗法師[31]の解に、根、聞くこと能わず、耳識、知ること能わず。合して聞くこと能わず。（卍続蔵本一八八右）此れ則ち不聞なり。親たり音旨を承くとは、説伝するに簡異す。故に我聞と曰う。

問うて曰く、如来五十年の説法、阿難は仏に仕えて適（たまたま）二十五年を経たり。前の二十五年、阿難は総じて聞かず。何故に一代の教、皆な我聞と曰うや。答えて曰く、『報恩経』に云うに依らば、阿難の為

に重ねて十二部経を説きたまう。[33] 是の故に一代の教、皆な我聞と曰う。

問うて曰く、阿難、何為(なんす)れぞ能く十二部経を持つや。答えて曰く、阿（高基本・上巻二一丁左）難、金華(こんけ)三昧を得て、能く十二部経を持てり。又、『涅槃経』に云く、「阿難、八法を具足して能く十二部経を持てり。一に信根堅固なり、二に其の心質直なり、三に身に苦痛無し、四に常に勤めて精進なり、五に念心を具足す、六に心に憍慢無し、七に聞慧を成就す、八に聞くに従いて智慧を生ずるなり」[34] と。八法を具足して能く十二部経を持てり。面は満月の如くして土女奔馳(ほんち)し、目は青蓮華に類(に)て貴賤の咸な仰ぐなり。仏光、夜を照らしたまい、慶喜の言を奏して聞けり。天蕊、朝に開き、晨に舞蹈の楽に帰す。如来、法を演ぶるに常に瓶受の能有り。大聖、経を弘むるに乃ち金言の美有り。一たび聞かば倶に八法を領し、斉しく四生を修む。所以に重ねて聞きて、十方、茲に於て再唱す。親たり音旨を承け、傍伝に簡異するが故に我聞と曰う。上来、三種の不同有りと雖も、総じて第二に聞（高基本・上巻二二丁右）成就を明かし竟んぬ。

【①―一―三　時成就】経に曰く、「**一時**」とは、述して曰く、第三の時成就なり。亦た三門に分別を作す。第一に仮名の時を釈し、第二に不思議の時を釈し、第三に正しく其の時を釈す。

第一に仮名の時とは、陶家の輪勢、一極時の如し。[35] 又、『倶舎論』に云うが如し。[36] 時の中の極少は、一刹那[37]の時なり。凡そ人の一念に九十刹那有り。一刹那の時に九百の生滅有り。一百二十の刹那を一の怛刹那(たんせつな)[38]と名づく。六十の怛刹那を、一の臘縛(ろうば)[39]と為す。三十の臘縛を一の牟呼栗多(むこりた)[40]と為す。三十の牟呼栗

多を一日一夜と為す。此れ則ち第一の仮名の時を釈し竟んぬ。

第二に不思議の時を釈すとは、諸仏境界不思議の時、一刹那に於て一劫を摂む。[41] 一時に（高基本・上巻二二丁左）普応して竟に差別無きが故に一時と名づく。又、『維摩経』に説く、「或るは衆生有りて、久しく世に住することを楽わば、菩薩は即ち七日を演べて以て一劫と為す。或るは衆生有りて、久しく住することを楽わざれば、菩薩は即ち一劫を促て以て七日と為す」[42] と。又、大通智勝如来の如し。[43]『法華経』を説く時、会の聴者、六十小劫に座を起たざるも、食頃の如く為したまう。[44] 此れ則ち第二の不思議の時を釈し竟んぬ。[45]

第三に正しく其の時を解すとは、法王啓運の日、大衆嘉会の時なるが故に一時と云う。『仏地論』に云く、「一部の経を説く時、刹那相続と為るに非ず。乃至、究竟を総じて一時と名づく」[46] と。又、真諦三蔵の解に云く、輪王の出世には、七宝一時なり。[47] 法王の出世には、法宝一時なり。[48] 機教符会して、差異の時無からしむ。[49] 故に一時と言う。良に小品、彼を立てて有と謂うも、斯れ大乗は元より来ること無く、往くこと無く、当も常、現も（高基本・上巻二三丁右）常の代、妄りに空華を見るも、滅・実滅の初にあらず。劫石、[50] 茲に於て（卍続蔵本一八八左）仮称す。所以に六十の小劫を一時に摂在す。明らかに知んぬ、妄立の言、境に託して方に称す。時義の為す所、説と聴の二無し。故に一時と言う。

又、三蔵の解に云く、十義を具足するが（大正蔵本一〇一八）故に一時と名づく。一に仏出世の時、二に正法を説く時、三に正法を聴く時、四に正法を持つ時、五に正法を思う時、五に正法を修むる時、七に善種を下

す時、八に善種を成熟する時、九に善種を解脱する時、十は心平等の時なり。

且く一に仏出世の時とは、輪王出世の時には、七宝一時に得べきが如し。法王出世の時には、法宝一時に聞くべし。輪王出世、未だ見ざる者に聞かしむ。

二に正法を説く時とは、仏、正法を説き、一切の狂聾、皆な醒悟を得。故に一時と名づく。

三に正法を聴く時とは、四の因縁有り。一に（高基本・上巻二三丁左）宿因有り、二に正信有り、三に願楽、四に尊重を生ずるなり。此の因縁を具す、是れ聴法の時なり。故に一時と名づく。

四に正法を持つ時とは、三の因縁有り。一に自行円満と為し、二に他行成就と為し、三に他の諮を承けて処有りと為す。此の三縁を具す、是れ正法を持つ時なり。

五に正法を思う時とは、五の因縁有り。一に相似を思択す。偽[51]を簡んで真を取るなり。二に転た勝を思択す。真金を錬るが如し。三に得果を思択す。月朗らかに雲を除き、衆、見るを楽う所の如し。又、女質の覆を以て厳と為すなり。四に無窮を思択す。如意珠の財を出すに竭くること無きが如く、択法も亦た是れ理を顕すこと無窮なり。五に利益を思択す。日光を見るに作業息まざるが如く、仏の法味を得て化導するも無辺なり。此の五義を具す、是れ思択の時なり。

六に正法を修むる時とは、五の因縁有り。[52] 一に智根利く煩悩障を除く、二に信具足して業障を除く、三に人天に生じて（高基本・上巻二四丁右）報障を除く、四に寂静を楽いて散乱障を除く、五に仏の正法と値い邪帰障を除くなり。此の五縁を具す、是れ好修の時なり。

七に善種を下す時とは、為に菩提心を発すに十因有り。一に本に依る、仏性の故に。二に器に依る、人天道に依るなり。三に地に依る、八禅に依るが故に。四に三宝に依る、行不退と為るが故に。五に因に依る、一切衆生に依りて種因を下さんと為るが故に。六に意楽に依る、唯だ大菩提心を発さんと願うが故に。七に智に依る、過失と功徳とを観ずるが故に。八に信に依る、三宝と四諦の七処を信ずるが故に。九に行に依る、割肉飼鷹等の行[53]に依るが故に。十に廻向に依る、所有の善根、衆生の為なるが故に。此の十事を具す、善種を下す時と名づく。

八に善種を成就する時とは、四の因縁有り。一に宿に善根を植ゆ、即ち因の成就なり。二に中国に生ず、即ち処所の相応なり。三に善友に親近す、諮を承くること他の為なり。四に説の如く（高基本・上巻二四丁左）修行して、諸の放逸を離る。此の四の縁を具す、名づけて善種を成就する時と為す。

九に善種を解脱する時とは、五の因縁有り。一に善友に親近する時、二に正法を聴聞する時、三に正法を持つ時、四に正法を思う時、五に正法に帰する時なり。此の五事を具する、善種を解脱する時と名づく。

十に心平等の時とは、心に若し高下あれば、聴法に入らず。若し能く沈を抜き、浮を抑えなば、念智平等にして正法に入ることを得。心平等の時と名づく。

此の十義を具すが故に一時と名づく。

又、長耳三蔵[54]、時を解して云うに三種有り。一に分段の時、二に不思議の時、三に仮名の時なり。一

（卍続蔵本一八九右）に分段の時とは、五蘊を体と為し、四相を相と為す。[55] 一期の報限、陶家輪の如く、世極に即して住す。分段身[56]の時と名づく。二に不思議変易の時とは、謂く変易生死の相続、法の分斎に於ては知り難し。不思議変易の時と名づく。三の仮（高基本・上巻二五丁右）名の時とは、外国には劫波（こうは）[57]と名づく。自に三義有り。一に迦羅（から）[58]、二に三摩耶（さんまや）[59]、三に世流布なり。迦羅とは、此れ別相と云う。戒律を制するが如し。大戒の時に聞き、小戒の時に聞かず。出家の時に聞き、在家の時に聞かず。国王、時に聞くことを得て、余人、聞くことを得ず。二に三摩耶の時とは、此れ破邪見の時と云う。五部阿含[60]、九分達磨[61]と為す。黒白を簡ばず、一切に用いるを得。三に世流布とは、「一時、中首林[62]中に在り」「一時、恒河岸[63]に在り」と云うが如し。調音起転、即ち是れ世人の法語なり。破邪見の時、及び世流布の時に依らしむるが故に一時と名づく。[64]

問う、此の中の時とは、何に依りて建立するや。答えて曰く、『仏地論』に云く、「時とは即ち是れ有為[65]の法の上、仮りに分位を立つ。影像、色心等に依りて総じて仮立するが故に、不相応行[66]、蘊の所摂なり」[67]と。上来の三種は不同なり。総じて第三の（高基本・上巻二五丁左）時成就を明かし竟んぬ。

【①—一—四　主成就】経に曰く、「**薄伽梵**[68]」とは、述して曰く、第四の主成就なり。亦た三門に分別を作す。第一に薄伽梵の名を釈し、第二に薄伽梵の身を釈し、第三に上の主字を釈す。

第一に薄伽梵の名を釈すとは、『瑜伽論』に云く、大勢力有りて、能く大魔を破すが故に薄伽梵と名づ

くと。[69] 又、云く、坦然として菩提座に安坐し、任運に魔を摧く大勢力有るが故に、[70] 薄伽梵と名づくと。

又、『仏地論』の説に依らば、「婆伽梵とは、具さに六義有り。第一に自在、第二に熾盛、第三に端厳、第四に名称、第五に吉祥、第六に尊貴の義なり。第一に自在の義とは、一切煩悩の為に撃縛せられざるを、自在と名づく。第二に熾盛の義とは、猛炎の智火の為に（高基本・上巻二六丁右）焼錬せらるるが故なり。[71] 第三に端厳の義とは、三十二相の為に荘厳せらるるが故なり。第四の名称の義とは、一切の殊勝功徳の悉く円満するが為の故なり。第五の吉祥の義とは、人天の親近・供養するが為の故なり。第六の尊貴の義とは、一切の功徳を具して有情を安楽せんが為の故なり。斯の六義を具すを婆伽梵と名づく」と。[72]

四魔[73]と言うは、一に蘊魔を破す、有漏の五蘊を体と為す。二に煩悩魔を破す、一百二十八根本煩悩、[74] 及び随煩悩[75]を体と為す。三に死魔を破す、有漏の五蘊、諸の[76]無常相を名づけて死魔と為す。四に天魔を破す、第六の他化自在天子を天魔と為すが故なり。

『薩婆多論』に云く、「能く四種の魔を破すが故なり。故に薄伽梵と名づく」[77]と。又、『倶舎論』に云く、菩提樹下に一切の煩悩魔を破す。金剛座上に一切の天魔を破す。三月命を留めて一切の死魔を破す。涅（高基本・上巻二六丁左）槃に入りて一切の蘊魔を破すと。[78]

又、『大集経』に略して壊魔の義を述ぶ。「空を観ずるが故に蘊魔を壊す。無相を観ずるが故に煩悩魔を壊す。無願を観ずるが故に死魔を壊す。三を具して菩提に廻向するが故に天魔を壊す」[79]と。

又、云く、「第一に身の不浄を観ずれば（卍続蔵本一八九左）、蘊魔を壊す。第二に受は是れ苦と観ずれば、煩悩魔

を壊す。第三に身の無常を観ずれば、死魔を壊す。第四に法無我を観ずれば、天魔を壊す」[80]と。斯の六義を具すを、薄伽梵と名づく。此れ則ち第一の薄伽梵の名を釈す。

第二に薄伽梵の身を釈すとは、其れ三義有り。一に報身、二に化身、三に法身なり。第一に報身とは、地上菩薩の為に法を説く。第二に化身とは、二乗の人の為に法を説く。第三に法身とは、法身常寂として自を利し、他を利す。三種の不同有りと雖も、為(いわ)く見の不異と異となり。声聞は丈六の身を見、菩薩は無辺の身を見、諸仏は法性身を見るが如し。（高基本・上巻二七丁右）是の如く一縄に三相を生ず。[81]眼暗なるに是れ、其れ蛇と為し、眼明なるに其れ縄と見るが如し。智者、審らかに観ずるに、唯だ其れ麻と見ん。報・化・法身も亦復た是の如きなり。若し其れ通ぜば（大正蔵本一〇一九）、三に即して是れ一なり、一に即して是れ三なり。若し其れ述せば、三に即して三に非ず、一に即して一に非ず。水・氷・波の三種に異有るが如し。氷に即して是れ水なり。水に即して是れ氷なり。[82]水の外に波無く、波の外に水無し。報・化・法身も亦復た是の如し。此れ即ち第二に薄伽梵の身を釈し竟んぬ。

第三に正しく其の主字を解すとは、『大智度論』に依りて云わば、其れに五種有り。一は仏の説、二は聖弟子の説、三は諸天の説、四は神仙の説、五は変化の説なり。[83]今、此の経は、即ち是れ仏の説なることを明かす。仏、教主と為るなり。仏と言うは覚を以て義と為す。其れに三種有り。一は自覚、二は覚他、三は覚満なり。声聞は、生空の智を得と為す。但し能く（高基本・上巻二七丁左）自覚の菩薩は、法空の智を得と雖も、覚は未だ満ならずと為す。諸仏は、自覚・覚他・覚行円満の故に称して仏と為すなり。仏とは

三界の法王、四生の慈父にして、神光を千刹に放ち、法雨を五焼[84]に灑ぐ。所以に外道は帰依し、天魔は稽首す。玉毫[85]は皎潔として地獄を照らし、以て消亡す。頂相は岧嶢[86]として、天人も其の際を覩ること莫し。解し難く、測り難きが故に仏と号す。

上来、三種の不同有りと雖も、総じて第四に主成就を釈するを明かし竟んぬ。

【①―一―五　処成就】経に曰く、「**在室羅筏住誓多林給孤独園**（室羅筏に在して誓多林の給孤独園に住したまう）」とは、述して曰く、第五の処成就なり。亦た三種有り。第一に国を顕し、第二に林を顕し、第三に園を顕す。

第一に国を顕すとは、即ち是れ室羅筏[87]国なり。漢に名づけて聞城と云う。蓋し是れ碩徳・広学・鴻儒[88]の嘉声、遠震するが故に名づけて（高基本・上巻二八丁右）聞城と曰う。旧に云う舎衛国は、即ち是れ中天竺国なり。仏在世の時、勝軍王[89]所治の城にして、周回六千余里なり。其の城中に二の窣覩婆[90]有り。一は是れ仏の姨母・摩訶波提比丘尼[91]の精舎、一は是れ須達長者[92]の故宅中の窣覩婆なり。此れ即ち第一に国を顕し竟んぬ。

第二に林を顕すとは、即ち是れ誓多林に住す。『大智度論』に云く、「衆生を憐愍せんが為の故に誓多林に住す。住と言うは、四威儀[93]中、是れ其の一の住なりと。住に三種有り。一に天住、二に梵住、三に聖住なり[94]」と。一に天住とは、布施・持戒・忍辱の為に、三事を得たるが故に生天を得るを名づけて天住と為す。第二に梵住とは、四無量心の慈・悲・喜・捨の為に、梵天[95]、乃至、非想非非想天[96]に生ずることを得るを名づけて（卍続蔵本一九〇右）梵住と為す。第三の聖住とは、空・無相・無願を行じて、三空

三（高基本・上巻二八丁左）昧に住するが為の故に聖住と名づく。

『智度論』に云く、「復た四種の住有り。一に天、二に梵、三に聖、四に仏住なり」[97]と。前の三住は声聞・縁覚等の為なり。四の仏住とは、首楞厳三昧[98]、八万四千の諸の法蔵の故なり。故に名づけて仏住と為す。誓多林と言うは、漢に最勝林と云う。即ち此れ城外の東南五里に誓多林有り。即ち是れ祇陀太子[99]所施の林なり。祇陀は翻じて戦勝王と云う。故に戦勝と名づく。此れは是れ第二の林を顕し竟んぬ。

次に第三に園を顕すとは、『涅槃経』に云く、園とは須達、仏の為に林を買い、太子の施す所なりと。[100]又、解すに初の国は通化の処、即ち室羅筏国なり。後の園は別化の処、即ち誓多林なり。国に在ることは俗流を化せんが為なり、園に住することは僧衆を統べんが為なり。亦た是れ喧と静を双べ挙げて、道と俗を兼ねて明かす。仏在世の時、勝軍王の所治の国なり。之れを異国に伝えて、称して（高基本・上巻二九丁右）遠聞と曰う。遠聞に四有り。一に財宝を具す、二に妙欲の境、三に多聞の饒く、四は解脱に豊かなり。

城内の故墓の上に窣覩婆有り。是れ仏の姨母の精舎なり。次に東に窣覩婆有り。是れ須達の故宅なり。此れ善勝と云う。城の東南五六里に誓多林有り。此れ勝林と云う。旧に祇陀と云う。是れ給孤独園なり。昔、善施[101]、仏の為に伽藍を建立するも、今以て荒廃せり。東門の左右各々に石柱を建つに高さ七十尺余、無憂王[102]の造なり。

善施長者、仁にして慈愍し、積みては能く散じ、貧乏を拯済して孤老を哀恤せり。時に其の徳を美めて給孤園と号す。仏の功徳を聞きて、深く尊敬を生ぜり。大精舎を建て仏の降臨を請わんと舎利子に命ぐ。

随いて瞻[103]て揆るに、唯だ太子の誓多林の園、其の園処のみ閑静[104]なり。善施、往詣して具さに情を以て告ぐ。太子、戯れて言く、「金を布きたること[105]（高基本・上巻二九丁左）地に遍ぜば、我が園、方に売らん」と。善施、之を聞きて喜悦を生ぜり。即ち金蔵より出し、言に依りて地に布くも、小しく未だ遍ぜざる有り。太子、請留して曰く、「仏は誠に良福田なり。宜しく種植すべし」と。善施、即ち此の地に於て精舎を建立す。仏、阿難に告げて曰く、「園地は善施の置く所、樹林は誓多の施す所なり。二人、同心を式て功業崇し。今より已去、応に此の地を名づけて誓多林給孤独園と為すべし。然るに聖人の形に定方無し、寧ぞ常処有らんや。但だ物の為に信を生ずるが故に、委しく具さに題す。樹を施すと園を買うとは別なるが如し。

『賢愚経』[106]に説く、「彼の云く、舎衛城国、波斯匿王の輔相の大臣を須達多と名づく。広く巨富にして道徳を説く。云に其れ七児有り。六は已に婦を取り、唯だ第七の者のみ未だ婚せず。殊勝の姿容を揀択せんと欲せんが為に、諸婆羅門に嘱して尋ね覓むることを為さしむ。後に王舎城中に於て長者の護珍という有り。唯だ一（高基本・上巻三〇丁右）女のみ有り、端厳なること比無し。

乃ち彼の国に往きて其の婚事を論ず。正しく其の家を見るに、仏僧を請わんと諸の供具を辦ぜんと欲して、相承するに暇無し。須達、怪しみて問う、『何の所為を欲せんや』と。答えて曰く、『仏を迎え請す』と。須達、忽ちに仏名を聞き、身毛皆な竪ち、所得有るが如し。心に悦預を懐き、重ねて問うて云く、『何をか仏と名づくるや』と。長者、対えて曰く、『汝、聞くべからずや。迦毘羅城の白飯の子、姓は瞿曇氏、字は悉達多なり。其れ生まれて未だ久しからずして相師（卍続蔵本一九〇左）、之を占いて、当に必ず輪王なるべしと。

舎を棄て出家せば、無師自覚にして貪恚痴を尽くす。其の心平等にして諸の衆生に於て、猶し父母の等しく一子を視るが如し。一切に勝ると雖も而も憍慢無く、塗割[107]の二事に其の心二無し。十力[108]・四無畏[109]・五智・三昧[110]・大慈大悲、及び三念処[111]の故に号して仏と為す。明、我が請を請けたまう。是の故に匆匆[112]にして未だ相待する暇あらず』と。須達の言く、『善い哉、大士よ、言う所の仏とは（高基本・上巻三〇丁左）功徳無量なり。今、何の処にか在りしや』と。長者、答えて言く、『今此の間、王舎城に在りて、迦蘭陀竹林精舎[113]に住したまう』と。

須達、心に其の仏を念ぜば、仏、無量の功徳をもて、忽然として光明らかなり。其の明、猛盛なること猶し日輪の如し。即ち光を尋ねて出づるに城門の下に至る。如来の神力もて門は自ら開く。門路に天祠有り。須達、之を礼す。尋いで還るに黒闇なり。心に惶怖を生じて本処に還らんと欲す。

城に一の天神有りて、須達に告げて言く、『仁者よ、子、如来の所に往かば、多く善利有らん』と。須達、言く、『云何が善利なるや』と。天の言く、『長者よ、仮使人有りて、真宝[114]の駿馬百疋、宝車百乗を給絞し、金を鑄りて人と為し、其の数も復た百なり。端政の女人、身に瓔珞を佩び、衆の宝もて厠填し、上妙の宮宅殿堂屋宇、彫文刻鋳の金盤・銀粟の数も各の一百を以て一人に施し、是の如く展転して、閻浮提所須の功徳を尽くすとも、（高基本・上巻三一丁右）人有りて、意を発して一歩、如来の所に詣るに如かじ』と。

須達（大正蔵本一〇二〇）多の言く、『善男子よ、汝は是れ誰ぞや』と。天の言く、『長者よ、我れ是れ相勝婆羅門の子なり。汝は往昔の善知識なり。我れ往日[116]に舎利弗・大目犍連を見て、心に歓喜を生ぜり。身を捨て

て北方の天王毘沙門の子に作ることを得たり。専ら知りて此の王舎城を守護す。我れ舎利弗を見て、心に歓喜を生じてすら、尚し是の如きの妙好の身を得たり。況んや如来・無上の法王を見んをや』と。須達多、聞き已りて即ち仏所に還り、仏足を頂礼せば、仏は為に法を説きたまい、須陀洹果[117]を得たり。

便ち世尊を請いて舎衛に降臨したまう。仏、則ち語りて言く、『卿が舎衛国に、精舎の相い容受すること有るや否や』と。須達多の言く、『仏よ、若が垂顧したまわば、便即ち営辦せん』と。仏、黙然として須達の請を受けたまう。復た言く、『生れてより已来、未だ斯の事を為さず。唯だ願くは如来よ、舎利弗を遣わし、儀則を指受したまえ』と。

爾の時に如（高基本・上巻三一丁左）来、舎利弗に勅して、須達と共に一車に乗らしむ。神力を以ての故に一日夜を経て、舎衛国に到れり。時に須達多、舎利弗に白して言く、『此の大城の外、何れの処にか地[118]有りや。近からず遠からず、多くの池泉・樹林・華果、清浄の閑務有らば、我れ当に中に於て精舎を造立すべし』と。時に舎利弗の言く、『祇陀の園林、最も第一と為す』と。

須達多、遂に往きて祇陀に謂いて曰く、『我れ仏の為に精舎を造立せんと欲す。唯だ仁者の園中のみ、造立に堪ゆるべし。吾れ今、買わんと欲す。能く与えらるや否や』と。祇陀、答えて曰く、『設い真金を以て地に布くとも、猶を相い与えじ』と。須達多の言く、『林地は我に嘱す、汝は便ち金を取れ』と。祇陀、答えて曰く、『我が園は売らず。云何んが金を取らんや』と。須達の言く、『若し意の可さざれば、共に断事の人の所に往かん』と。

即ち共倶に断事の人の所に至る。断事の人の言く、『園は須達に嘱す、祇陀は金を取るべし』と。即時にして須臾に車馬に（高基本・上巻三二丁右）真金を載負して、地に一日の中に五百金を布くも未だ周遍せず、須達は沈吟せり。（卍続蔵本一九一右）祇陀の曰く、『長者よ、若し悔ゆれば、意に随いて止むることを聴さん』と。須達多の言く、『吾れ悔いざらん』と。自ら念ず、『当に何れの蔵の金を出さば足るべしや』と。

祇陀、念じて言く、『如来法王は真実無上なり、所説の妙法は清浄無染なり。故に斯の人をして宝を軽んぜしむこと、乃ち爾なり』と。即ち須達に語りて言く、『余、未だ遍ねからざるも、復た金を須めず。請う、相い与えらるれば、我れ自ら仏の為に門楼を造立せん。常に如来をして経遊出入せしめたまう』と。祇陀、自ら門楼を造り、時に須達多も、七日の中に大房三百口、禅房・静室六十三所を造立して、冬屋・夏堂の一切を具足せり。

即ち香爐を執り、王舎城に向かい遙かに是の言を作さく、『所設、已に辦ぜり。唯だ願くは如来よ、慈哀憐愍し、諸の衆生の為に是の住処を受けたまえ』と。仏、時に懸に知り、即ち大衆と与に王舎城を発ちたまい、譬えば（高基本・上巻三二丁左）壮士の臂を屈申する頃[119]の如きに、舎衛国祇陀園林の須達が精舎に至りたまえり。仏、既に到り已り、須達多は其の所設を以て如来に施を奉ぜり。仏、時に受け已り、即ち其の中に住したまう[120]」と。故に「住誓多林給孤独園」と云う。

又、真諦三蔵に準ぜば、経中に説くが如しと。「須達、過去に狗留孫仏[121]の為に、時に此の地に於て精舎を造立せり。爾の時、地広は四十里なり。須達を毘沙長者と名づく。金を以て地に布き、宝衣もて之

を覆いて供養を為せり。俱那含牟尼仏[122]の時、長者を大家主と名づく。爾の時、此の地広は三十里なり。迦葉仏[123]の時、亦た精舎を立てり。爾の時、此の地広は二十里なり。長者を大悋と名づく。今、釈迦牟尼仏の時に於て、此の地広は十里なり。金を以て地に布けり。後の弥勒仏の時、此の地広は四十里なり。七宝を以て地に布く。爾の時、儴佉王[124]と為り、出家修道して（高基本・上巻三三丁右）阿羅漢果を得ん[125]」と。

問う、俱に城園を挙ぐるに、一に随いて即ち得たり、何ぞ須く双べて挙ぐるべきや。答えて曰く、真諦の記に云く、住処に二有り。一に境界処、二に依止処なり。[127]境界処に住するは、在家の徒を化せんが為なり。依止処に住するは、[128]出家の遠人を統せんが為なり。国の境界住処を知らしめ、後に祇園を挙げて、近人の為に依止別処を知らしめんが故なり。

又、伝の中に説く、此の城辺に於て二の精舎有り。一に是れ磨伽羅小堂、[129]二に是れ給孤独園なり。小堂を濫せんことを恐れるが故に園処を標す。今、総じて八義なり。一に緇素の二衆[130]を化せんが為なり。二に遠近の二人の為なり。三に濫を簡うが為なり。四に喧静の両亡の為なり。五に悲智の二事の為なり。六に道体・道縁の為なり。七に自利・利他の為なり。八に無住の道を成ぜんが為なり。

其の所応に随うが故に二処を挙ぐ。遊化と居止となり。目足[131]を為て在り。遊化は城に在り、居止は園に在り。在は[132]之れ住と其の（高基本・上巻三三丁左）義、一なり。上来の広釈、総じて第五に処成就を明かし竟んぬ。

注

1 長耳三蔵に関する先行研究として、山口弘江『維摩経文疏』所引の「普集経」について」（二〇〇四年、『印度学仏教学研究』五三―一）、船山徹「長耳三蔵と『耶舎伝』―ナレーンドラヤシャスとの関わり」（二〇一四年、『仏教史学研究』五六―二）、櫻井唯「初唐の異国僧―長耳三蔵とその思想」（二〇一七年、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六二）等を参照した。このうち櫻井唯氏の論考では、慧浄と円測の著作によって長耳三蔵の学説を整理しており（八九二～八九四頁）、それに照らすと、法崇疏中の①は「時」の第二説、③は五位説に該当するが、②に対応するものが見いだせない。

2 師子頬王とは梵語 Siṃhahanu の音写語で、カピラ城の元王。子として浄飯王・白飯・斛飯・甘露飯の四男と、甘露味という一女がいたとされるが諸説ある。釈尊からみると祖父にあたる。

3 浄飯（Śuddhodana）とは、師子頬王の長男で、後にカピラ城の王位を継いだ。釈尊の実父。

4 白飯（Śuklodana）とは、師子頬王の次男で、釈尊の叔父にあたる。

5 大正蔵本では「二」となっているが、高基本にもとづき「三」に修正した。

6 斛飯（Droṇodana）とは、師子頬王の三男で、釈尊の叔父にあたる。

7 甘露飯（Amṛtodana）とは、師子頬王の四男で、釈尊の叔父にあたる。『大日経』の訳者である善無畏（六三七～七三五）は、この甘露飯王の系統より出たとする伝承がある。

8 悉達多とは、釈尊の出家前の名称であり、「目的を成就する者」を意味する梵語 Siddhārtha の音写語。釈尊は、浄飯王と摩耶夫人（Mayā）の間に長男として生まれた。

以下、浄飯王・白飯・斛飯・甘露飯の子の名が列記されるが、資料によって釈尊の家系図は様々である。ここでは『五分律』からの引用とあるが、仏陀什・竺道生訳『弥沙塞部和醯五分律』（『大正蔵経』二二巻一〇一頁中段）の家系配当とは相違しており、むしろ龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』（『大正蔵経』二五巻八三頁中段）記載の伝承と一致している。

9 難陀とは梵語 Nanda の音写語で、浄飯王と瞿曇弥夫人（Gotamī）の間に次男として生まれた。釈尊の異母弟にあたる。

釈尊の出家後、カピラ城の王位を継承したが、後に帰郷した釈尊の教導により出家したと伝えられる。

10 抜提とは、梵語Bhadrikaの音写語で、ここでは白飯王の長男とされるが、斛飯王・甘露飯王の子とする伝承もある。父の死後、王位を継承したが、後に釈尊の説法を聞いて出家したとされる。

11 提沙とは、梵語Tiṣyaの音写語で、ここでは白飯王の次男とされるが、斛飯王・甘露飯王、また甘露味の子とする伝承もある。釈尊にしたがって出家し、教団に入ったとされる。

12 提婆達多とは、梵語Devadattaの音写語で、ここでは斛飯王の長男とされるが、白飯王あるいは甘露飯王の子とする伝承もある。提婆達多は、出家し釈尊の教団に入ったが、後に阿闍世王（Ajātaśatru）を後ろ盾として教団の独立を企て、また釈尊の命を三度狙ったがことごとく失敗したとされる。

13 阿難陀とは、梵語Ānandaの音写語で、ここでは斛飯王の次男とされる。しかし、白飯王あるいは甘露飯王の子とする伝承もあり、一般的に甘露飯王の子とされる。幼少の頃に出家して釈尊の教団に入り、侍者として釈尊を支えるとともに、様々な教説を聞き、後に多聞第一と称された。

14 摩訶男とは、梵語Mahānāmanの音写語で、ここでは甘露飯王の長男とされるが、白飯王・斛飯王の子とする伝承もある。弟の阿泥盧豆に出家を勧め、自身は在家者として家を守り、後に優婆塞として教団を支えたとされる。

15 阿泥盧豆とは、梵語Aniruddhaの音写語で、「阿那律」とも書かれる。ここでは甘露飯王の次男とされるが、白飯王・斛飯王の子とする伝承もある。釈尊が帰郷した時に兄の勧めもあって、阿泥盧豆は出家して教団に入った。ある時に阿泥盧豆は、釈尊の説法中に眠ってしまったことを悔いて不眠を貫き、失明する代わりに天眼を得て、後に天眼第一と称された。

16 子の時とは、夜半の零時頃のことである。

17 尼連禅河とは、梵語Nairañjanāの音写語で、インド・ビハール州にあるガンジス河の一支流を指す。釈尊は、尼連禅河の辺にある苦行林で修行し、後に同河で沐浴後、村娘のSujātāより乳粥の供養を受けたとされる。

18 金剛座とは、釈尊が覚りを開いた宝座のことであり、ブッダガヤーの菩提樹下にある。金剛とは、宝座の不壊堅固さを表

すとも、また煩悩を断じた禅定・智慧の力を表すともされる。

19 結跏とは、結跏趺坐の略称。禅定を行うための正規の坐法である。

20 等正覚とは、阿耨多羅三藐三菩提（anuttarāṃ samyaksambodhi）の訳語で、最高の覚りを表す。

21 天魔波旬とは、梵語 pāpīyas の音写語で、悪魔の呼称。釈尊の成道や涅槃の場面で、天魔波旬は釈尊を誘惑し、時に魔軍をもって攻撃したとされる。

22 阿夷陀とは、梵語 Asita の音写語で、占相師の名である。阿夷陀は、釈尊を身ごもった摩耶夫人の夢占いを行い、子の将来について、在家ならば転輪聖王に、出家ならば仏陀になると予言したとされる。

23 曼陀羅華とは、梵語 māndārava の音写語で、天界や仏国土を荘厳する樹と考えられた。しばしば仏伝の重要な場面で、天人や樹神が釈尊を祝福して、曼陀羅華によって散華したとの記述が見られる。真っ赤な房状の花を咲かせる学名 Erythrina indica というマメ科の高木に比定されている。

24 浄飯王の弟・斛飯王の夫人が、阿難陀（Ānanda）を産んだことを表す。

25 本文で『五律分』からの引用とすることから、高基本「附録」七丁左～八丁右では、出典として仏陀什訳・竺道生訳『弥沙塞部和醯五分律』（『大正蔵経』二二巻一〇一頁中段）に注目している。確かに類似する内容であるが、人名の訳語が相違するのに留まらず、白飯王・斛飯王・甘露飯王の王子たちの名が入れ替わり、ほぼ一致しない。実際には龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』（『大正蔵経』二五巻八三頁中～八四頁上段）からの取意引用と判断される。

26 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（『大正蔵経』九巻三〇頁上段）。

27 迦葉仏とは、過去七仏の第六の仏、すなわち釈尊よりも前出の仏となる。迦葉は、父梵徳と母財主との間に産まれ、後に尼拘律樹（nyagrodha）のもとで成道を果たし、二万の弟子がいたとされる。なお、尼拘律樹は、学名 Ficus benghalensis に同定されており、ベンガルボダイジュという和名がある。

28 沙弥とは、梵語 śrāmaṇera の音写語で、十戒を受けた見習い僧を意味する。

29 親光等造・玄奘訳『仏地経論』（『大正蔵経』二六巻二九一頁下段）。

30 二諦とは、真諦（第一義諦、真如に即した真実）と俗諦（世俗に即した真実）のことである。

31 朗法師については素性が不明であり、朗法師に帰せられる解釈も、他経論中に見いだせない。撰者法崇と親交があった不空には、有力な弟子として恵朗がおり、その口伝とも考えられる。恵朗は、不空滅後に真言密教の法灯を継いで第七祖となったが、高齢により四年ほどで示寂したため、恵果が事実上の第七祖となったとされている。

32 十二部経とは、仏の教法を内容や形式によって十二に分類整理したもの。修多羅（sūtra：契経）、祇夜（geya：重頌）、伽陀（gāthā：諷頌）、尼陀那（nidāna：因縁）、伊帝目多伽（itivṛttaka：本事）・闍多伽（jātaka：本生）、阿浮達磨（adbhutadharma：未曾有）、阿波陀那（avadāna：譬喩）、優婆提舎（upadeśa：論議）、優陀那（udāna：自説）、毘仏略（vaipulya：方広）、和伽羅（vyākaraṇa：授記）である。

33 『大方便仏報恩経』（『大正蔵経』三巻一六三頁中段～一六四頁上段）。

34 曇無讖訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻六〇一頁下段）、および慧厳訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻八五〇頁上段）。

35 陶家の輪勢とは、陶器を作る時に、轆轤（ろくろ）がひと時も止まることなく、勢いよく回ることを譬えた表現と考えられる。

36 以下の数単位の説明は、世親造・玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』（『大正蔵経』二九巻六二頁上段～中段）に基づくと考えられる。

37 一刹那とは、梵語 kṣaṇa の音写語で、時間の最小単位を表す。

38 怛刹那とは、梵語 tatkṣaṇa の音写語で、一二〇の刹那からなる時間を表す。

39 臘縛とは、梵語 lava の音写語で、六〇の怛刹那からなる時間を表す。

40 牟呼栗多とは、梵語 muhūrta の音写語で、三〇の臘縛からなる時間を表す。

41 一劫とは、梵語 kalpa の音写語で、芥子劫や盤石劫の喩のごとく、きわめて長大な時間を表す。

42 鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』（『大正蔵経』一四巻五四六頁下段）。

43 大通智勝如来とは、『法華経』化城喩品に登場する過去仏。大通智勝如来は三千塵点劫の過去に出世し、八千劫にわたり法

華の教えを説いたとされる。

44 食頃とは、食事をするほどの短い時間のこと。

45 窺基撰『妙法蓮華経玄賛』（『大正蔵経』九巻四頁上段）に、「時会聴者亦坐一処。六十小劫身心不動。聴仏所説謂如食頃」とある。

46 親光等造・玄奘訳『仏地経論』（『大正蔵経』二六巻二九二頁上段）。

47 真諦（Paramārtha：四九九～五六九）は、西インド出身の僧で、梁代に中国に渡来し、『摂大乗論』『中辺分別論』や『大乗起信論』等の主要論書を漢訳し、四大訳家の一人に数えられる。なお、「真諦三蔵の解」に関して、高基本「附録」八丁左では、法雲編『翻訳名義集』の名を挙げるが、一致する文を見いだせないことから出典不詳である。

48 輪王とは、古代インドで理想とされた王のことであり、正式には転輪聖王（cakravartirājan）という。転輪聖王は七宝を具足し、武力ではなく法によって人々を統治すると考えられた。

49 七宝とは、転輪聖王が具足する七種の宝であり、具体的には輪宝・象宝・馬宝・珠宝・女宝・居士宝（主蔵神宝）・兵宝（将軍宝）を指す。このうち輪宝・象宝・馬宝・兵宝は武力、珠宝・女宝・居士宝は財力の象徴とされる。

50 劫石とは、盤石劫の喩に出てくる四方一由旬の大磐石のことで、長大な時間を象徴する。

51 高基本および大正蔵本・卍蔵本のいずれも「為」とするが、文脈から判断して「偽」とした。

52 正法を修めるための五つの因縁として、煩悩障・業障・報障・散乱障・邪帰障を除くべきとしている。常の五障とは異なり、特に散乱障・邪帰障は、他文献中に用例が少ない。

53 割肉飼鷹等の行とは、釈尊の前世である、尸毘王の本生譚（Śibijātaka）のことである。尸毘王は、鷲から鳩を救うために、自らの肉を割いて鷲に施し、善業を積んだとされる。

54 長耳三蔵については本論「はじめに」参照。長耳三蔵における「時」の解釈については、櫻井唯「初唐の異国僧―長耳三蔵とその思想」（二〇一七年、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六二）八九三頁下段に言及が見られる。

55 五蘊（色と受・想・行・識）が仮に和合したところの存在の体は、絶えず生・住・異・滅という四つの相状を瞬時に流転

しつづけるという。

56 分段身とは、分段生死の身のこと。すなわち寿命の長短、身体の大小などの限りがある凡夫の身を表す。

57 劫波とは、梵語 kalpa の音写語で「時分」等と訳す。一般的には、きわめて長大な時間の単位を表す。

58 迦羅とは、梵語 kāla の音写語で、「時」「時節」「時分」等と表す。生から死へと直線的に経過する世俗的時間とされる。

59 三摩耶とは、梵語 samaya の音写語で、様々な意味を有するが「時」とも訳される。阿含をはじめ多くの経典冒頭で用いられる「一時」（時成就）の梵語は、ekasmin samaye である。これは黒月・白月等の特定の時を指すのではなく、まさに仏と聴衆の意識が共有され一致したところの特別な時間を表すと考えられる。

60 漢訳では、『長阿含経』『中阿含経』『雑阿含経』『増一阿含経』の四阿含が一般的であり、五部阿含がいずれを指すのか判然としない。ただし、四八九年頃、僧伽跋陀羅によって漢訳された『善見律毘婆沙』には、長阿含・中阿含・僧育多阿含・鴦堀多羅阿含・屈陀伽阿含の五種が挙げられている（『大正蔵経』二四巻六七七頁上段）。また、高基本「附録」九丁右では、『倶舎宗八問講録』の説として曇無徳部・薩婆多部・迦葉遺部・弥沙塞部・婆蹉富螺部を挙げ、また『翻訳名義集』によって小乗の四阿含と大乗との総称とする説を提示している。

61 九分達磨とは、釈尊の教法を九種類に類型化した「九分教」あるいは「九部法」のことと考えられる。具体的には、契経・重頌・授記・偈頌・感興語・如是語・本生譚・未曾有法・方広の九種であり、十二分教よりも古形と考えられている。

62 高基本および大正蔵本・卍続蔵本では「中首林」と活字されるが、「尸首林」の誤りと考えられる。曇無讖訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻四四二頁中段）等によれば、尸首林とはガンジス河の岸辺にあった林と目される。

63 恒河岸とは、梵語 Gaṅgā の音写語で、インド北東部を流れるガンジス河の岸辺を指す。

64 長耳三蔵の「時」に関する解釈については、円測撰『仁王経疏』（『大正蔵経』三三巻三六三頁下段）に類文が見られるが、それ以上に道氤『御注金剛般若波羅蜜経宣演』（同八五巻二二頁中段）、および『金剛般若経疏』（同八五巻一四九頁下段～一五〇頁上段）と一致している。なお、両本はともに敦煌出土写本の活字本であり、前者は Pelliot. 二一七三番と二一三二番、

また後者は同二三三〇番にもとづく活字本である。

65 有為とは、因縁の和合によって作り出された生滅変化する諸現象である。

66 不相応行とは、心不相応行の略称であり、心法・色法に関係しながらも、いずれでもない有為法を指す。唯識の五位百法では、時（kāla）を有為法中でも、行蘊に関連する心不相応行法に位置づけている。

67 親光等造・玄奘訳『仏地経論』（『大正蔵経』二六巻二九二頁上段）。

68 薄伽梵とは、梵語 bhagavat の音写語、釈尊等の仏陀への尊称として「世尊」と訳す。

69 玄奘訳『瑜伽師地論』（『大正蔵経』三〇巻四九九頁下段）からの取意。

70 玄奘訳『瑜伽師地論』（『大正蔵経』三〇巻七六五頁中段）。

71 高基本および大正蔵本・卍続蔵本では「撃縛」とあるが、意味としては「繋縛」が適当か。

72 親光等造・玄奘訳『仏地経論』（『大正蔵経』二六巻二九二頁上段～中段）に類文が見られるが、それよりも良賁述『仁王護国般若波羅蜜多経疏』（同三三巻四三八頁上）の記載と一致する。

73 四魔とは、仏道修行を妨げ、悩ませる四種の魔である。具体的には、蘊魔（様々な煩悩を生み出す五蘊）、煩悩魔（心身を汚し悩ます煩悩）、死魔（生命を奪う死）、天魔（人の善行をさまたげる欲界の他化自在天子）である。

74 百二十八根本煩悩とは、唯識における見惑・思惑の煩悩の総数であり、見惑に一一二種、思惑に一六種の煩悩があるとする。

75 随煩悩とは、根本煩悩に付随して派生する煩悩の相称である。特に唯識では、根本煩悩である六大惑に付随する形で、二〇種の随煩悩（八種の大随惑、二種の中随惑、一〇種の小随惑）が生じるとする。

76 大正蔵本では「謂」とあるが、高基本の「諸」により改めた。

77 『薩婆多論』について、高基本「附録」九丁左では、失訳『薩婆多毘尼毘婆沙論』全八巻（『大正蔵経』一四四〇番）に比定するが、類文は見いだせない。他方、良賁述『仁王護国般若波羅蜜多経疏』（『大正蔵経』三三巻五一九頁上段）に同文がある。

78 世親造・玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』に、「世尊先於菩提樹下。已伏天魔煩悩魔故」（『大正蔵経』二九巻一五頁下段）と説かれるが、

死魔・蘊魔の記載はない。やや表現は異なるが、窺基撰『大般若波羅蜜多経般若理趣分述讃』（『大正蔵経』三三巻二九頁下段）に類文がある。

79 曇無讖訳『大方等大集経』（『大正蔵経』一三巻五三頁中段）。

80 曇無讖訳『大方等大集経』（『大正蔵経』一三巻五三頁上段～中段）に類文が続くが、同一の文は見いだせない。

81 一縄に三相を生ずとは、唯識の三性説に関連して説かれる蛇縄麻の喩である。縄を蛇と見間違えるのが遍計所執性、その縄は麻の集まりと見るのが依他起性、縄・蛇・麻のいずれも実体がないと覚るのが円成実性とされる。

82 大正蔵本には「即水是冰即水是水」、高基本および卍続蔵本では「即氷是水即水是氷」とあるが、文脈より判断して後者を採用した。

83 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』（『大正蔵経』二五巻六六頁中段）に同趣旨が説かれるが、やや表現が異なる。むしろ慧遠撰『観無量寿経義疏』（『大正蔵経』三七巻一七三頁中段）の説と近似している。

84 五焼とは、殺生・偸盗戒・邪婬・妄語・飲酒という五悪を犯した者は、死後に悪道に堕ち、大火で焼かれるような苦痛を被るという。

85 玉毫とは、仏の眉間にある白毫相のことである。

86 岩嶢とは、山が高くそびえること。

87 室羅筏国とは、梵語Śrāvastī の音写語で、「舎衛城」とも音訳される。中インドのコーサラ国にあった商業都市で、優れた人材を多く輩出すると世に知られたことから、「聞城」の異称もある。室羅筏国は、祇園精舎があったことから仏典にもよく登場する。

88 鴻儒とは、儒教の大学者であり、転じて学識の深い人を称す。

89 勝軍王（Prasenajit）とは、釈尊在世時にコーサラ国を統治した王であり、「波斯匿王」とも音訳される。多くの王子の中で、祇陀（Jeta）と毘瑠璃（Virūḍhaka）が有力であったとされる。

90 窣覩婆とは、梵語 stūpa の音写語で、「仏塔」等と訳される。

91 摩訶波提比丘尼とは、梵語 Mahāprajāpati の音写語で、早逝した摩耶夫人（Māyā）に代わり、姉妹である摩訶波提が、幼少の釈尊を養育したとされる。

92 須達長者とは、梵語 Sudatta の音写語で、釈尊のために祇園精舎を建立したとされる。

93 四威儀とは、行・住・坐・臥という四種のふるまいである。

94 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』（『大正蔵経』二五巻七五頁下段）の取意。

95 梵天とは、ここでは色界の初禅天、梵天界（Brahmaloka）を指す。婬欲を離れた世界とされる。

96 非想非非想天とは、無色界の第四天であり、三界の最頂にあることから有頂天とも呼ばれる。

97 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』（『大正蔵経』二五巻七六頁上段）。

98 首楞厳三昧とは、梵語 śūraṃgamasamādhi の音写語。あらゆる障碍を打ち破る勇猛な仏の三昧のことであり、大乗仏教で重視された。

99 祇陀太子とは、梵語 Jeta の音写語で、勝軍王（Prasenajit：波斯匿王）の王子である。

100 曇無讖訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻五四〇頁中段～五四一頁中段）からの取意。

101 善施とは、釈尊のために祇園精舎を建立した須達長者（Sudatta）の意訳名である。

102 無憂王（Aśoka）とは、紀元前三世紀頃に活躍したマウリヤ王朝第三代の王で、インド全域を統一支配したとされる。最終的に法（dharma）による統治を目指し、その一環としてインドの各地に詔勅を刻んだ円柱を建立した（アショーカ王柱）。

103 高基本および大正蔵本・卍続蔵本の本文では、いずれも「瞻」とあるが、漢字の意味から判断して、卍続蔵本の注「瞻」を採用した。

104 大正蔵本・卍続蔵本では「閑静」とあるが、文脈より判断して高基本の「閑静」を採用した。

105 大正蔵本・卍続蔵本には「希」とあるが、文脈より判断して高基本の「布」を採用した。

106 「賢愚経云」とあることから、同経「須達起精舎品」（『大正蔵経』四巻四一八頁中段～四二一頁中段）からの取意とも目されたが、あまり一致しない。むしろ、曇無讖訳『大般涅槃経』（同一二巻五四〇頁中段～五四一頁中段）の記載とほぼ一致している。

107 塗割とは、恩人の来訪のために一手に名香を塗り、怨人の来訪のために一手を刀で割くという意味である。仏は、これらと異なり、恩人・怨人のいずれが来ようとも、いつでも平等の心であるという。

108 十力とは、仏に具わった十種の智力。具体的には、処非処智力・業異熟智力・静慮解脱等持等至智力・根上下智力・種種勝解智力・種種界智力・遍趣行智力・宿住随念智力・死生智力・漏尽智力である。

109 四無畏とは、仏が説法する際、四つの自信から何物をも畏れないという。具体的には、正等覚無畏・漏永尽無畏・説障法無畏・説出道無畏である。

110 三昧とは、samādhi の音写で、禅定により精神統一された状態のことをいう。

111 三念処とは、また三念住ともいう。仏はどのような衆生に対しても、常に正念にあることを三種に分類して示した概念である。すなわち仏は、衆生が仏を信じようとも喜ばず、衆生が仏を信じなくても憂えず、衆生に信・不信の両者があろうとも喜んだり憂いたりせず、ただ正念正智に安住しているという。

112 匆匆とは大変忙しいこと。

113 竹林精舎とは、マガダ国の首都王舎城の北にあった僧院である。迦蘭陀とは、梵語 kalandaka の音写語で、竹林の所有者であった長者の名であり、後に釈尊に寄進したとされる。

114 高基本および大正蔵本・卍続蔵本では、いずれも「真実」であるが、意味がとりがたいため、本文内容が酷似する曇無讖訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻五四〇頁下段）にもとづき「真宝」に改めた。

115 『法崇疏』では「相勝」であるが、曇無讖訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻五四一頁上段）では「勝相」となっている。

116 往日とは、過ぎ去った日のこと。

117 須陀洹果とは、梵語 srotāpanna の音写語で、預流果と意訳する。聖者になるための四向四果のうちの最初の段階であり、これにより聖者の流れに入り、不退転となる。

118 地とは、仏僧が止宿するための精舎を建立する適地のこと。

119 高基本では「須」であるが、本文内容が酷似する曇無讖訳『大般涅槃経』の「譬如壮士屈伸臂頃」（『大正蔵経』一二巻五四一頁中段）という用例にもとづき、大正蔵本・卍続蔵本の「頃」を採用した。

120 曇無讖訳『大般涅槃経』（『大正蔵経』一二巻五四〇頁中段～五四一頁中段）。

121 狗留孫仏とは、梵語 Krakucchanda の音写語で、過去七仏のうち第四番目の仏とされた。

122 倶那含牟尼仏とは、梵語 Kanakamuni の音写語で、過去七仏のうち第五番目の仏とされた。

123 迦葉仏とは、梵語 Kāśyapa の音写語で、過去七仏のうち第六番目の仏とされた。

124 儴佉王とは、梵語 Śankha の音写語で、弥勒仏が下生する遠い未来における須達の名前である。吉蔵撰『金剛般若疏』（『大正蔵経』三三巻九六頁上段）によれば、王の肌が螺貝のように真っ白であったことが名の由来であり、「螺王」とも呼ばれたという。

125 阿羅漢果とは、梵語 arhat の音写語で、煩悩を滅し尽くした聖者の呼称である。人々の供養や布施を受けるに相応しいとの意から、「応供」とも意訳される。

126 須達が釈尊のみならず、過去七仏に精舎を寄進したという真諦三蔵の説は、広く注釈論書に見られる。その中でも、吉蔵撰『金剛般若疏』（『大正蔵経』三三巻九六頁上段）では「真諦三蔵云」として、また道世撰『法苑珠林』（同五三巻五九二頁中段）では「依真諦師伝云」として、類似する内容が説かれている。

127 良賁述『仁王護国般若波羅蜜多経疏』（『大正蔵経』三三巻四三九頁上段）等、中国で製せられた注釈・論書中に真諦三蔵の説として広く見られるが、その大元の出典は不詳である。

128 大正蔵本では「往」であるが、文脈から判断して高基本・卍続蔵本の「住」を採用した。

129 磨伽羅小堂とは、舎衛国の東園にあった鹿子母堂のことである。慧琳撰『一切経音義』では、鹿子母堂の梵語を蜜利伽羅、鹿磨多、母跛羅娑駄等とし、磨伽羅母堂という旧訳は訛略であると記している。還梵を試みるならば、原語は mṛgamātāprāsāda と推定される。

130 緇とは黒色のことで出家者を表し、素とは白色のことで在家者を表す。

131 「目足」の意味について、高基本「附録」では、「目足の文とは、解有りて行無きは、目有りて足無きが如し。今は解行兼備の故なり」（一〇丁右）と解説している。

132 高基本をはじめ諸版では「之与住……」とするが、高基本「附録」一〇丁右では、「之」の前に「在」が脱字している可能性を指摘している。当翻刻でも文脈から判断して、「在は……」を補って訳すこととした。

〈キーワード〉法崇、『仏頂尊勝陀羅尼経教迹義記』、長耳三蔵、阿難、婆伽梵、祇樹給孤独園